

東京近郊における草笛の会の実態と愛好家の意識

細野幸江・宮田正信・木村正典

東京農業大学農学部 e-mail: kokubu-zoen@ac.auone-net.jp

Questionnaire Survey on 'Grass' Whistle Clubs and Their Amateur Players in the Tokyo Metropolitan Area

Yukie HOSONO, Masanobu MIYATA and Masanori KIMURA

Tokyo University of Agriculture

Summary

A questionnaire survey and additional interviews were done to clarify present perspectives on 'grass' whistles clubs and their amateur players in the Tokyo metropolitan area. Most of the grass whistle clubs consist of people of 60 years and above, many of whom began playing grass whistles after the age of fifty. Their popular motivation for beginning to play grass whistles was listening to other players, and they joined a club in order to learn and improve their grass whistle playing skills. The most common materials of leaves used as whistles were found to be in the following order: Yabukoji (*Ardisia japonica* Bl.), *Spathiphyllum*, Shirakashi (*Quercus myrsinaefolia* Bl.); however some people use artificial leaves made of plastic. The players expected that grass whistle playing would relieve stress and help maintain health as well as provide enjoyment in playing music. They also considered that the grass whistle was an efficient tool for initiating personal communication, and that this was an attractive feature of the grass whistle. Our survey indicated that players were enthusiastic about spreading the playing of grass whistles, and providing a social contribution through some concerts, which would contribute to self-actualization of the players by way of praise from others.

Keywords: communication, elderly, music, self-actualization

コミュニケーション, 高齢者, 音楽, 自己実現

はじめに

「草笛は人間の起源と脈を同じくし、加工の必要のない自然的な素材でできた楽器である」(Lee, 2002)といわれており、多くの楽器と同じように音声を補う信号や警報器具として使われたのが始まりだと考えられている(Lee, 2002)。楽器としての草笛は、中国の杜祐(801)による通典 200 巻の中の楽の部(巻 144-147)に、葉(よう)あるいは吹葉(すいよう)として記され(岸辺, 1968a)、五代全蜀始祖王建棺座石彫には、墓の棺座の周囲に彫られた 24 人の楽人のうち「西面(7)吹葉」に、葉を口に当てて草笛を吹く女楽人の姿がみられる(岸辺, 1968b)。このように、唐から五代にかけての中国では、草笛が宮廷燕饗楽の構成楽器の一つであったことが明らかになっている。

多くの楽器が、雅楽とともに隋・唐から日本に伝わっ

たのは推古・奈良朝といわれているが、わが国に残る当時の唐朝楽器に関する文献には、葉、吹葉の記述はみられない(岸辺, 1968a)。草笛について記された資料は非常に少ないが、草笛という文字がみられる文献の中で、平安時代中期(960 年代)に書かれたとされる宇津保物語は、わが国でも古いものの一つとされている(河津, 2001a)。この中に、「くさぶえ」「くさかりぶえ」の二つが登場するが、どのようなものを指しているかはわかっていない(佐藤・佐藤, 1997)。その後、月村齋宗硯(1513)により著された藻塩草の中に、葦の葉を巻いて吹く笛のことを「くさぶえ」とよぶこと、柴の葉をとって柴笛を吹くことがでてくる。この資料から、16 世紀には「草笛」「柴笛」という言葉があったことがわかる(佐藤・佐藤, 1997)。

一般的にわが国では、草笛は野の植物を用いて音を出す子どもの遊びと考えられている。その中ではカラスノエンドウの莢やアシ、ムギ、スズメノテッポウなどの茎を使ったもの、木の葉を丸めたものなどがよく

2010 年 2 月 19 日受付. 2010 年 7 月 12 日受理.

知られている。いっぽう、1枚の葉を唇に当てて息を吹きかけ、唇の当たる部分を振動させて音を出すものもあり、これは柴笛ともよばれている。現代ではその両方を合わせて草笛と呼んでいる。

柴笛は、息を出す方向や強さで音の高低をつけることにより、曲を演奏することが可能である。他の草笛が単に音を出すことを楽しむ遊びであることに對し、柴笛は吹き方に技術を要することから、比較的年齢の高い子どもの遊びであったと考えられる。現在では吹ける人の数も非常に少なく、一般での認知度も低い。本研究での草笛とは、柴笛の技法で吹かれている草笛のことを指している。

近年、各地に草笛の会を組織して演奏を楽しんでいる愛好家たちがいる。草笛演奏というと抒情歌などを一人静かに吹くものと思われがちだが、現代の草笛では個人演奏だけにとどまらず、アンサンブルなどの、より音楽的な演奏が試みられている。彼らは演奏活動を通して、技術の伝承や保存、地域活動を行っている。それらの活動は愛好家たちの生活に張りをもたらし、自己実現に大きく貢献していると考えられる。また愛好家の中には草笛に対して強い情熱を注いでいる人も少なくない。

本研究では、東京近郊で活動する草笛の会会員を対象に、草笛活動の現状、草笛に対する意識を調査し、草笛から広がる興味・関心から、草笛が愛好家の生きがいや自己実現およびコミュニケーションの活性化に、どのようにかかわっているかを探った。

調査方法

東京近郊で活動する草笛の会13団体の会員を対象に、2008年7月から10月にかけて、アンケート(選択、記述回答)および聞き取り調査を行った。

アンケート調査では、各会の定例会で調査用紙に記入させ、当日欠席している会員および訪問できなかった会については、代表者にとりまとめを頼み、後日郵送または手渡しによって回収した。調査用紙を渡した人からは全員回収した。

調査内容は、回答者の属性(性別、年代、出身地)、草笛をいつ頃、誰に教えてもらったか、草笛を始めてからの年数、始めた理由、愛好会に入った理由、草笛に使う植物、社会参加の実態、健康観、草笛以外の趣味、草笛に対する意識、および草笛に対する自由記述である。始めた動機および愛好会に入った動機については、回答を三つまで選択させた。また、草笛に対する意識は、全設問を八つのカテゴリーに分類し、5段階評価で回答を求めた。

聞き取りでは、会の設立の経緯、活動状況および個々の思いを調査した。会の設立の経緯、活動状況については、代表者にあらかじめ用意した設問に答えても

らったが、書面による回答となった会もあった。なお、会員同士の会話や雑談から得られた内容も聞き取りに含めた。

アンケートでは、回答者102名中有効回答数99(男性58名・女性41名)が得られた。回答者の年齢と数は、20～29歳1名(1%)、30～39歳1名(1%)、40～49歳4名(4%)、50～59歳10名(10%)、60～69歳51名(52%)、70～79歳31名(31%)、80歳以上1名(1%)であった。

結果および考察

1. 東京近郊における草笛活動の現状

1) 草笛の会

東京近郊には草笛の会が複数存在するが、正確な数は把握できていない。今回調査した中では1978年頃に発足した八王子草笛の会が最も古い(第1表)。つぎは、1989年に東京都小平市の花小金井南公民館主催の草笛講座から発足した花南草笛クラブである(第1表)。この会は、日本で最初の公民館所属の草笛の会である。また同年、関東一円の草笛愛好家26名によって「関東草笛の会」が結成され(河津, 2008a)、この会の会員を中心にここ20年ほどの間に東京近郊各地にいくつもの草笛の会が発足した。

会の活動は、主に公民館、市民センターなど公共の施設を利用して行われているところが多い。これらの施設は、練習場所だけでなく、会員の募集や発表の場としても活用されている。ここ20年間で草笛の会が増えてきた背景には、公民館主催の草笛講座からサークル活動の発足、発表の場所の提供および演奏活動の依頼など、行政の適切なサポートや助言がある。公民館事業の充実が、会の自主的活動をより活発にしていると考えられる。

活動の主な内容は草笛の練習であり、その大半が公民館主催のイベントや市民音楽祭、演奏会などでの発表に向けたものである。発表は、個人演奏もあるが、多くは出演者全員による合奏で、なかにはパートを分けた重奏など、より音楽的な演奏も試みられている。また、ストリートパフォーマンスを目的とした会もあり、休日の公園での野外演奏を主な活動としていた。

これらのことから、現代の草笛は、抒情歌などを一人静かに吹くという、かつて私たちが抱いていた草笛のイメージとは異なり、複数の人たちと一緒に吹くことにより、今までとは違った楽しみ方を見出していることがわかる。

会員たちからは、「自分たちが草笛を吹けなくなる前に後継者を育てたい」「子どものうちに体験させれば、大人になってから吹くのではないか」といった声が多く聞かれ、多くの人に草笛を知ってもらうこと、特に子どもたちに興味を持たせたいとの思いから、公園や

Table 1. The status of the grass whistle clubs in the Tokyo metropolitan area.
 第1表. 東京近郊の草笛の会の活動状況.

会の名称	設立	会員数	活動拠点	定例会	活動内容	発表会・演奏会	参加している地域のイベント	ボランティア活動	会の親睦行事	今後取り組みたいこと 現在困っていること
1 八王子草笛の会	1978年頃	4人	八王子市	設けていない	保育園・小学校などでの草笛の指導と演奏	なし	なし	あり	なし	なし
2 花南草笛クラブ	1989年	約25人	小金井市	月2回	草笛練習・事務連絡	年4回	公民館まつり 関東草笛の会に参加	あり	あり	地域に結びついていたい 若い人が少ないので子供たちに入ってもらいたい
3 町田草笛の会	1993年	7人	町田市	月1回	初心者への草笛指導 草笛演奏	年1回	地域のふれあいサロン活動 への参加・公民館まつり	あり	あり	会員の増加 特に若年者の入会
4 日野草笛の会	1994年	60人	日野市	月1回	草笛練習・個人発表	年1回	地域のまつり・児童館・ 学校・デイホーム(老人) 日野市市民文化活動の団体 登録	なし	あり	会員の募集・施設での演奏会・ 次世代の育成・専門職にアピー ルしたい草笛を身近でやれるよ うな若い人に会に入ってもらいたい
5 草笛&リーフルを愛する会 (旧全国草笛研究会)	1994年	45人	江東区 新宿区	月1回	草笛練習	年1回及び 依頼があったとき	依頼があった場合に参加	なし	あり	東京都のヘブナーアーティストに合 格すること・練習場所確保
6 青梅草笛クラブ	1997年	14人	青梅市	月2回	草笛練習	年1回	福祉まつり・観梅市民まつり・ 自立センターまつり・新緑祭・ 関東草笛の会に参加	あり	あり	会員個々の発表会
7 八王子マーマーコール	1998年	8人	八王子市	月4回	2時間の合唱練習の中で 休み時間に練習している	年2回 (合唱と一緒に)	なし	なし	あり	会員が8人以上増えない
8 ふっさ草笛サークル	1999年	21人	福生市	月2回	草笛練習	年3回及び 不定期に多数	福生市主催七夕まつり・ さくらまつり・ 環境フェスティバル・ ふっさ子広場	あり	あり	合宿小諸などに行き現地の人 と交流したい・やめる人が多い・ 人が集まらない アンサンブルをしたい
9 草笛&リーフルを楽しむ会 「佐倉ふれあいルーム」	2000年	23人	佐倉市	月1回	草笛練習・個人発表	年1回	産業祭など	あり	あり	なし
10 草笛&リーフルを楽しむ会 「八街ふれあいルーム」	2000年	19人	八街市	月1回	草笛練習	年1回	単発で依頼される 地域のイベント	あり	あり	なし
11 森下草笛アンサンブル	2001年	不定	江東区	月1回	発表会のプログラムの打 ち合わせ中心	年1回 その他不定期でも	森下フェスティバル 足立区区民芸能祭	あり	あり	江東区の「まちかどアーティスト」 ライセンス取得海外ボランティア 集合状況が悪くなっている若い 人の力が欲しい
12 昭島草笛の会	2004年	11人	昭島市	月2回	草笛練習	なし	関東草笛の会に参加	あり	あり	早くそれぞれの練習の成果が上 がればいいと思う
13 木の葉笛ナンデス	2008年	8人	さいたま市	不定期	ストリートパフォーマンス	まだない	エントリーしたばかりで埼玉 県庁から依頼はあるが検討 中	なし	なし	北浦和公園内県立近代美術館 のライブハウスでの活動・通行人 の親子連れの親御さんの気持ち のゆとりの差

小学校などでの草笛教室に力を入れている人たちも少なくなかった。

このように、会の活動の根底には、草笛文化の消失への危機感からくる技術の伝承や普及への使命が感じられた。これは、草笛の認知度の低さにくわえ、回答者の年代構成にもみられるように、会員が高齢であることと関係がある。

2) 会員の実態

各会の会員数は、「関東草笛の会」を母体として、複数の会に所属している人もいる関係上、延べ245人に上った(第1表)。しかし、ほとんどの会で実際に活動している人の数は名簿上の会員数を下回っており、入会したものの活動には参加していない人も少なくないことがうかがえる。

会員は6:4の割合で男性の方が多く、年齢は60歳以上の方が全体の84%を占めていた。ほとんどの会が男女混合で構成されており、男性のみで構成されている会はなかった。女性のみで構成されている会一つであり、この会は女性コーラスの会の中で草笛も楽しんでた。入会に年齢制限を設けている会はなかったが、60歳以上の人だけで構成されている会があった。草笛の指導および会のとりまとめを男性が行っているところが多く、会の活動に積極的に参加しているのは男性の方が多かった。

初めて草笛を吹いた年齢は、50歳以上が全体の75%を占め、19歳以下は14%であった(第1図)。また、趣味として草笛を始めてからの年数を見ると、1年未満の人が7%、1~4年32%、5~9年26%、10~14年17%、15年以上16%で、全体の65%が始めてから10年未満の人であった。

草笛の会の会員は、回答者の年代構成からみると、多くがシルバーエイジといわれる60歳以上の人たちである。その中で若い頃から草笛を趣味としてきた人はごく少数であり、大半が50歳を過ぎてから初めて草笛を吹いた人達であった。

草笛を始めた理由をみると、「人の演奏を聴いて感動したから」「草笛の音が心を癒すから」と、自分の体

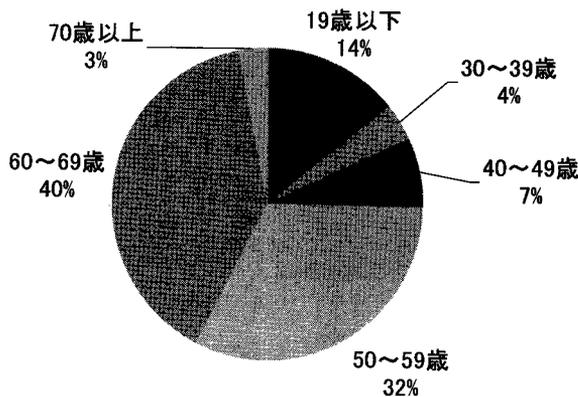


Fig. 1. Ages when amateurs tried playing the grass whistle for the first time.
第1図. 初めて草笛を吹いた年齢. (n=99).

験から始めた人が多く、音楽を楽しみたいと考えた人も多かった(第2図)。草笛の会に入った理由では、「草笛の技術の習得や向上のため」をあげている人が最も多かった(第3図)。彼らは吹ける人たちの中に入って一緒に吹くことが上達する手段だと考えていることがわかる。草笛の会では、はじめから草笛を吹くことができて会に入った人たちは少なく、何かの機会に草笛を聴いたことがきっかけで草笛を始めた人が多いことが明らかになった。

会員の多くは草笛教室や草笛の会で吹き方を教えてもらっており、子どもの草笛が遊びの中で身近な人から教わるのに対し、大人の草笛は、書道や陶芸などと同じように習いごとに近いとみられる。というのも、数は少ないが、カルチャースクールで草笛講座が成立しているからである。しかし、カルチャースクールでは、毎回講座が成立する人数を確保することが大変であるという。これは、草笛に対する人々の関心の低さを示しているが、草笛の吹き方を覚えるために、高額な受講料を払ってまでカルチャースクールに行くこともないと考えられたともいえる。

このように、東京近郊では草笛の会が広がり演奏活動が行われるようになったことが、草笛を吹く人を増やすことにつながっていったと考えることができる。

以上のことから、草笛は昔から多くの人に吹かれてきたわけではなく、興味をもった一部の人達の間で受け継がれてきたものであり、草笛の会の発足が、時間に余裕のある比較的高齢の愛好者増加に大きく貢献したと考えられる。また、演奏活動は草笛の普及に有効な手段になっていたといえる。

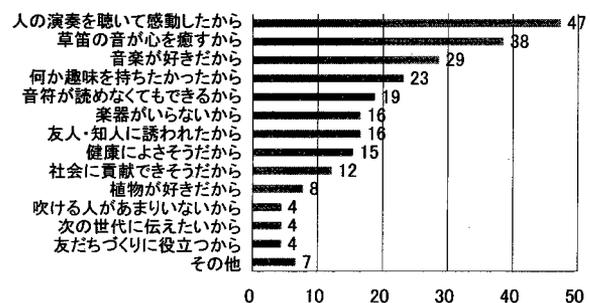


Fig. 2. Reasons why amateurs began playing the grass whistle. (We received up to three answers.)
第2図. 草笛を始めた理由. (n=91). (三つ以内の回答を求めた).

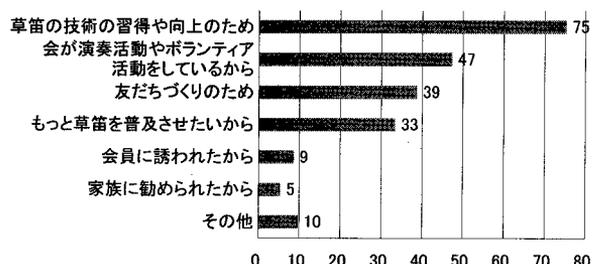


Fig. 3. Reasons why amateurs joined the grass whistle club. (We received up to three answers.)
第3図. 草笛の会に入った理由. (n=93). (三つ以内の回答を求めた).

3) 草笛に使われている植物

日本語大辞典(日本語大辞典第二版編集委員会, 2001)には、柴笛について「カシ、シイ、ツバキなどの若葉を口に当てて吹きならすこと、またその笛」と記されている。柴とは山野に生える小さい雑木のことをいい、方言では柴笛によく使われるカシやシイのことを指す地方もある。10世紀半ばに記された旧唐書の中には、嘯葉(しょうよう)として橘や柚の葉が最も適していると記されている(諸橋, 1984)ように、古来その多くは照葉樹の葉が使われてきたと考えられる。

今回の調査では、会員が草笛に使用している植物の数は、木本植物 28, 草本植物 5, 計 33 種類であった(第 2 表)。会員は、柴笛の技法を用い、実にさまざまな植物で演奏を楽しんでいた。その中でもっとも多くの人々が使用していた植物は、木本のヤブコウジと草本のスパティフィラムであり、次いでリーフル、シラカシの順であった。

主に使っている植物の種類数をみると、1種類のみ 56%, 2種類 14%, 3種類 12%であった(第 4 図)。このことから、自分が常時使う葉を決めている人が多いことがわかる。

ヤブコウジは、樹高が低いので目につきにくいですが、里山、公園緑地、一般家庭の庭でもみることができる。常緑で一年を通して利用することができるので、自宅の庭に植えたり、鉢植えにして育てたりと、いつも葉が取れるようにしている人も多い。また、公園や歩道筋など、どこに生えているかを熟知している人たちもいた。吹きやすさに加えて、狭い庭、日当たりの悪い庭でも育てられることは多くの人に使われている理由の一つであろう。

スパティフィラムは、観葉植物であり、手ごろな価格で入手でき、室内で手軽に栽培することができることから、近年広く流通している。葉が柔らかく吹きやすい、破れにくいという理由で、比較的経験年数の短い人たちに多く使われていた(データ省略)。一年中新葉が出るので、ほとんどの人が自宅で育てながら利用していた。このほかベンジャミン、ドラセナ、ポトス

Table 2. Plant species used by grass whistle players.
第 2 表. 草笛に使用されている植物. (n=99)

使用する葉	回答数
スパティフィラム, ヤブコウジ	31
リーフル(合成樹脂で葉の形をしたもの)	17
シラカシ	16
ユズ	5
オムラサキツツジ, スダジイ(シイノキ), チャ, ベンジャミン, 何でも	4
サカキ, ツツジ, バラ	3
ウラジロカシ(カシノキ), クスノキ, クチナシ, ツルグミ, ビヨウヤナギ, ポトス, 不明	2
アオキ, アケビ, ウメドク, ギボウシ, クロモジ, ゲッケイジュ, サクラ, ティアレ・タヒチ, ツユクサ, ドラセナ, ネズミモチ, フジ, マンリョウ, ミヨウガ, ヤマコウバシ, ヤマモモ, その他	1

など観葉植物が使われていることは、現代の草笛の特徴といえる。

シラカシは、街路樹や公園に植えられるほか、庭木としても防風・防火のための垣根としても多く使われている。草笛は葉が柔らかい方が音を出しやすいが、シラカシの葉はやや硬いため吹くのに熟練を要する。しかし、一年を通して入手しやすいことおよび澄んだ美しい高音を出すことに加え、柔らかい葉では出しにくい低音がよく出ることなどの理由で好まれている。

複数の植物を使う人の中には、季節によって植物を使い分けしている人が多く、その葉を使うことで季節の変化を感じているという声も聞かれた。

草笛演奏には鋸歯の少ない葉が好ましいが、鋸歯のある葉を使用する場合は、葉の縁をハサミで切り、吹きやすい形にしていた。本来草笛は、吹くのに適した形状の葉を用いていたが、ハサミで簡単な加工を加えることによって、多種類の植物が使われるようになったと考えられる。

会員たちは、加工を施さない自然の葉を使うことにこだわりをもつ人、吹きやすく加工することでより美しい音を出そうとしている人など、さまざまな考えをもって植物を選んでいった。多くの方は、初め常緑樹の若葉などの柔らかい葉で吹き方を覚え、吹けるようになるにしたがって、自分の好みの葉を使うようになっていった。また、会によって好んで使われている葉に偏りがみられた。これは、最初に吹き方の指導をした人および技術的に優れた人の影響が大きいことを示している。

リーフルは合成樹脂製の模造葉で、草笛の音色が出る発明笛といわれており、演奏に適した柔らかさを持ち、植物の葉に比べ音程を変えやすいので初心者にも吹きやすいことから、草笛練習の導入部で使われることが多い。葉が破れることがない、常に携帯できる、保湿措置の必要がないなどの理由で、いつでもどこでも吹くことができることから、植物の葉を使わずリー

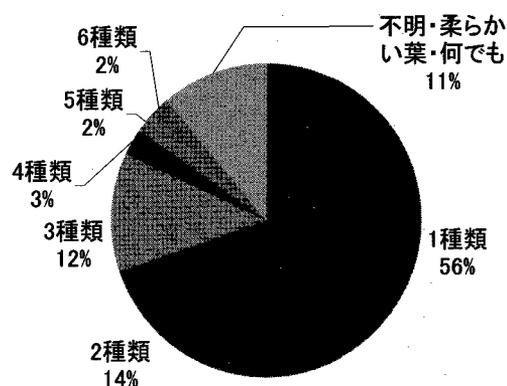


Fig. 4. Percentage of players using from one to more than six species as grass whistles. In this figure, what percentage of players used one, two, three, four, five, six and more plant species, were presented on a circle graph, respectively.
第 4 図. 一人が使っている植物の種類数と使用者の割合. (n=99).

フルのみで草笛を楽しんでいる人たちもいた。会員の中には、自然や植物に親しんでこそ草笛だという声が多い中、自然に親しむことより音づくりの楽しみに気持ちが向いているという人もいたことから、リーフルを使うことは、音楽を楽しむという、現代の草笛の一つの形の現れとみることができる。

2. 会員の意識

1) 楽器としての草笛

「関東草笛の会」代表世話人の河津哲也氏は、平成20年度会報(2008b)の中で次のように述べている。「草笛も平成当初の頃から比べますとかなり変わって来ました。個人で楽しむ草笛が、人に聴いてもらい、葉っぱで音楽する草笛になり、グループでの演奏を楽しむ草笛になって来ました。その意味では草笛の伝統が強く残る中国雲南や韓国等の草笛とはかなり変わってきたかと思います。」

これは、草笛の会の音楽性が、はじめは吹ける人たちが集まって自分の吹きたい曲を吹くことから始まり、多くの楽器を楽しむ人たちがそうであるように、技術が向上するに従って自然な流れで独奏から合奏へ、そして重奏へと、変化していったことを示している。

草笛を吹く人たちの大半は、人を感動させるには技術が必要だと考えている(第3表)。たしかに正確で美

しい音に情感をたっぷり込めて演奏される草笛には、人の気持ちを引きつける力がある。その音に「鳥肌が立つ」という表現をした人が何人もいた。演奏する側にとって、観客がそういう心境になってくれるような演奏ができることは、この上ない喜びであるとともに目標でもある。

アンケートでは、74%がもっと草笛の音楽性を追求したいと答えている。歌と同じでなんとなく覚えたメロディーは楽譜どおりでないことが多く、合奏の場合、個々の不正確な部分が合わさった時に微妙なずれを生ずる。そのずれが草笛の特徴であり、良さでもあるという声もきかれるが、より高度で完成された演奏を目指すときには、楽譜どおりに音を出すことが要求されてくる。そして、技術の向上に伴いより幅広いジャンルの音楽へと、常に目標は高いところへ向かっている。

ところで、音楽教育の領域では、「音楽にはまず技術がいる」と、「感動や体験が先である」という対立した考えが話題となってきた。これは、音楽を楽しむ人たちにとって現在でも盛んに論じられているテーマの一つである(若尾, 2000)が、草笛を楽しむ人たちの間にも、もっと正確な音を作り音楽性を追求したいと考えている人たちと、楽譜どおりでなくても楽しめばいいと考える人たちがいる。草笛でも、このような意見の食い違いが生じてくることは非常に興味深い。

草笛で音楽性を追求するには、より高度な技術を身につけなければならず、音楽的であることは聴く人に感動を与えることにつながる。それぞれの音楽性についての考え方は違ってても、多くの人が集まれば、一人の時にはなかった新たな目標が生まれ、会員たちはそのコミュニケーションを楽しんでいるようにみえた。

このように、草笛は音楽を楽しむ楽器としてとらえられていることがわかったが、実際には楽譜が読めると答えた人は全体の20%であり、楽譜がまったく読めないと答えた人も12%いた。少しなら読めると答えた67%の人の中には草笛の会に入ってから勉強して読めるようになったと答えた人も少なくなかった。

音符のわからない人が普通の楽器を習おうとすれば、楽譜の読み方から始めなければならない。しかし草笛では、口笛と同じように、メロディーさえ知っていれば楽譜が読めない人たちでも気軽にアンサンブルまで楽しむことができ、自分の出せない音域の曲では自由に転調して吹くこと

Table 3. Attitudes of players to grass whistle playing.
第3表. 草笛に対する意識調査。(n=99).

設 問	回答(%)					
	強く そう思う	そう 思う	どちら とも 言えない	あまり 思わない	全く 思わない	
音楽	人を感動させるには技術が必要だ	41	46	10	1	1
	もっと草笛の音楽性を追求したい	26	48	22	3	0
身体面	草笛を吹くのは体力がいる	14	58	21	6	1
	草笛を吹いていると身体の調子が良い	15	40	37	5	2
精神面	草笛を始めてから身体が丈夫になった	8	29	48	12	2
	人の演奏を聴くより自分で吹くほうが楽しい	10	39	47	2	1
	草笛を吹くとストレス解消になる	34	40	22	3	0
人間関係	草笛を吹くようになって性格が明るくなった	6	31	53	9	1
	草笛を始めてから友人が増えた	32	51	16	1	0
	草笛はコミュニケーションづくりに役立っている	16	66	14	4	0
地域活動	草笛仲間がいることははげみになる	26	63	10	1	0
	もっと多くの人に草笛を広めたい	36	48	13	2	0
	草笛は地域の活性に役立っている	9	48	31	10	1
自己実現	もっと草笛を使ったボランティア活動がしたい	12	58	24	6	0
	自分は草笛で社会貢献できている	16	39	31	8	5
	草笛で注目されるのはうれしい	22	47	23	6	1
生きがい	目標は常に高いところにある	21	49	23	5	1
	草笛を吹くことが生きがいだ	13	38	41	6	1
	草笛を吹くことで毎日の生活に張りがある	12	36	47	4	0
自然	聴く人が楽しんでくれるとうれしい	40	55	3	2	0
	草笛を始めて植物への関心が高まった	18	52	24	6	0
	野山の散歩が好きである	46	37	12	3	1

もできる。草笛は、楽譜が読めずに楽器演奏をあきらめていた中高年の人たちにとって気軽に音楽を親しむきっかけになったとみることができる。

一般的に、民族的な基層のカルチュアに近いほど参加するための障壁は低いと考えられており(若尾, 2000), 最も原始的な楽器である草笛は、誰もが始めやすい音楽ということができが、やめることも簡単である。いずれの会も名簿上の人数より実際の活動者の数が少ないのもそのためだと考えることができる。

2)健康への期待と癒し

会員への聞き取りで、「草笛演奏に当たって腹式呼吸は美しく演奏するための非常に重要な要素である。」「息を細く長く出すことが途中で途切れることなくなめらかに演奏するための秘訣であり、腹式呼吸ができないと息が続かず、一つのフレーズすら息継ぎなしでは吹くことができない。」という発言が聞かれた。一般に腹式呼吸は健康にいいといわれるが、実際に草笛演奏が健康に役立っているのであろうか。

アンケートでは「健康によさそうだから」と考えて草笛を始めた人が15%おり(第2図), 72%の人は草笛を吹くのは体力があると感じていた(第3表)。このことは、息を上げずに草笛を演奏することがいかに大変であるかを意味し、そのために心肺機能の向上を期待していることを示しているといえよう。そして現実には、草笛を吹いていると体の調子が良いと答えている人が半数以上いた(第3表)。

これらのことから、会員は美しく演奏するために日々練習を重ねることが健康につながるという期待感、またそうありたいという願望をもって、草笛を続けることが健康維持に役に立っていると感じることがうかがえた。

半数の人は人の演奏を聴くより自分で吹くほうが楽しいと答え、70%以上の人が草笛を吹くことでストレス解消になると答えていた(第3表)。草笛を吹くこと=音楽を奏でることは、自分の吐く息と唇の振動によって美しい音と流れるようなメロディーを生みだすところから、吹く人に一種の快樂をもたらしていると考えられる。

また、草笛演奏を聴いた人たちからは、草笛の音に癒されたという言葉をよく耳にした。初めて草笛の音を聴いたにもかかわらず、懐かしい音だったという人も少なくなかった。草笛の音は、雅楽の笛にも似た独特の音色で、他の西洋楽器では例えることができるものはない。柴田(1988)は、「日本人は雅楽を聴くことによって、すでに失われてしまった祖先の生活感情や、古代の儀礼を確認するのだ。」と述べている。草笛演奏を聴いた人たちは、草笛の音に雅楽の音色を感じ、自分の好きな曲や思い出の曲を耳にすることで、それが癒しや懐かしさにつながったとみることができよう。

3)コミュニケーションツールとしての草笛

中国の少数民族の中には、現在でも男女の愛情を確かめ合う行為として「歌垣」の風習が残っており、雲南省の哈尼族の圭山村では1980年代ごろまで草笛による歌垣が実際に行われていた(河津, 2003)。また、Lee (2002)は、草笛は狩猟における獲物の鳴き声の模倣や、合図、アフリカの talking drum のように音や旋律の符号化による山間僻地の通信手段として使われていたと推測している。しかし現代のわが国の草笛には通信手段としての機能はない。

「もし言葉が、人間の心のコミュニケーションを完全に行うことができるのであれば、音楽というものは存在しなかったであろう(E. T. Gaston)」(日野原, 1996)といわれるように、音楽は言葉ではかなえられない人と人とのコミュニケーションを結ぶことができる。海外に旅行した時などに、言葉は通じなくとも訪れた国の音楽を草笛で演奏することで、その国の人とすぐに親しくなれる(河津, 2001b; 2002)というように、異文化交流の一つの手段になることもその一例といえる。草笛演奏会後に、聴衆と演奏者の間で、演奏の仕方や素材について会話が弾む光景はよく見かける。

このように、聴く人との間にもコミュニケーションが生まれやすいことは、草笛が他の楽器と違う特徴の一つであり、前にみたように、楽器が自分の知っている身近な植物であることも理由の一つであろう。

一緒に吹く仲間とのコミュニケーションが向上することは言うまでもない。調査では、80%以上の人が「草笛を始めてから友人が増えた」「草笛はコミュニケーションづくりに役立っている」「草笛仲間がいることは励みになる」と答えている(第3表)。会員同士が気持を合わせて合奏することや、同じ目標に向かって努力することで仲間としての連帯感が生まれ、それが励みにもなっていることがわかる。また、彼らは草笛の普及に対しても強い意欲をもっており、84%の人がもっと多くの人に草笛を広めたいと答えた(第3表)。その背景には、失われつつある文化の継承ということのほか、多くの人たちとのつながりを求めていることがうかがえる。特に子どもや若者に教えたいと考えている人が多く、異世代との交流を望む声が強かった。

さらに約1/3の人が入会の理由に「友だち作りのため」をあげた(第3図)。仕事や家庭を離れて新しい人間関係を築きたいと願う人たちが、草笛をコミュニケーションツールとして選んだといえよう。定例会でのおしゃべりや練習後の交流が楽しみで来るという声も聞かれ、練習とは別に親睦会を設けている会も多く、宿泊で合宿を行っている会もあった。年齢を問わず共通の趣味をもつ人たちが集まるということに意義を感じている人たちが多かった。

このように、現代の愛好家たちは草笛を一人で吹くだけではなく、複数の人たちで演奏することが多い。

仲間とともに行う合奏や重奏は、連帯感や達成感を得ることにもつながっていた。ここでは人と人が、音による通信手段としてのつながりではなく、草笛の奏でる音楽を介してつながっており、会員はそこから生み出されるコミュニケーションに大きな魅力を感じていることがうかがえた。

4) 社会貢献と自己実現

小林(1989)は、「生きがいとは『生きて行く意味をもたらすもの』『自分の可能性を伸ばしていく自己実現の過程』である。」と述べ、高間・杉原(2004)は、「自分が習得した知識や技術を、作品を通して表現するのみならず、それを他の人や社会で教えることが、『表現』であり、『成果』となって、『自己実現』にもなる。」と論じている。

では草笛は、愛好家たちの生きがいや自己実現に、どう結びついているであろうか。

草笛を使ったボランティア活動には多くの人が会あるいは個人で取り組んでおり、その内容は主に演奏と吹き方の指導であった(データ省略)。草笛の会への入会理由では、「会が演奏活動やボランティア活動をしているから」が二番目に多く(第3図)、70%の人がもっと草笛を使ったボランティア活動がしたいと答えていた(第3表)。

ところが、「自分は草笛で社会貢献できている」という設問には、約半数の人がどちらともいえないか否定的であった(第3表)。これは、草笛を始めてからの経験年数および自分の演奏の上手下手、会の取り組み方により差が出たものと考えられる。そこで、回答者の経験年数を「10年未満」「10～14年」「15年以上」に分けて比較したところ、経験年数が高いほど社会貢献はできていると考える人の割合が高い傾向がみられ、「全く思わない」と答えたのは10年未満の人だけであった(データ省略)。

さらに、回答者の年齢を「60歳未満」「60～69歳」「70歳以上」で分けたところ、「そう思う」「強くそう思う」と答えた人の割合は、年齢が上がるほど高く、「どちらともいえない」と答えた人の割合は年齢が下がるほど高かった。また、男性に「そう思う」「強くそう思う」の回答が多く、「どちらともいえない」は女性に多かった(データ省略)。

回答者の65%が草笛を始めて10年未満の人たちであることから、明らかな傾向とまではいえないが、草笛経験を重ねることによって社会貢献への意識は高まっていくと考えてもよいかもしれない。さらに、生活の基盤となる仕事を終えて時間に余裕ができるほど、その時間を社会に役立てたいと考える人が増えるが、女性は高齢になっても家事などに時間を取られがちなので、男性ほどの意識の高まりはないのであろう。また、「どちらともいえない～全く思わない」と答えた人は、演奏を人に聞かせることが社会貢献とまではい

えないと考えている可能性がある。

「草笛を吹くことが生きがいだ」「草笛を吹くことで毎日の生活に張りがある」という設問では、どちらも約半数の人が「そう思う」「強くそう思う」と答えており、残りの人の大半は、「どちらともいえない」と答えている(第3表)。このことから、「生きがい」という言葉のとらえ方には、違いがあると考えられる。ほとんどの人は草笛を楽しんでいるが、それが生きがいとまでは言い切れない人、あるいは、ほかにそれ以上の生きがいを感じているものをもっている人もいるのであろう。生活の張りも同様である。このことは、趣味を生きがいという言葉にあてはめようとすることの難しさを示している。

しかし、聞き取りや自由記述からは、ボランティアで訪れた施設で、「楽しみに待っていた」と言われたことや大きな拍手をもらうことは、また訪れようという気持ちを引き起こし、自分が教えている人たちが上達していくことは、教える側にとっても大きな喜びになっていることがうかがえた。また、草笛で注目されることをうれしいと感じる人や、聴く人が楽しんでくれるとうれしいと思う人も多かった(第3表)。かかわった相手に認められることは自分に満足感が得られるばかりでなく、継続の意欲にもつながったとみることができる。

高齢者の社会参加のきっかけは、人とのふれあいを求める気持ちと、人の役に立つことで生きがいや心の豊かさを求めることにある(高間・杉原, 2004)という。また、内閣府(2009)「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成20年実施, 調査対象は60歳以上の男女)によると、地域のための奉仕的な活動を行うにあたって最も必要な条件では、「一緒に活動する仲間がいること」という回答が二番目に多い。大半が中高年の人たちが構成されている草笛の会でも、趣味を活かした社会参加を望む人が多く、仲間とともに活動するというところに大きな意味があるといえる。

退職後に社会貢献に生きがいを求める人は多いが、草笛愛好家たちは、草笛活動を通して生まれるコミュニケーションを楽しみながら、人前で演奏することおよび人に教えることで満足感を得ていた。これらのことは、彼らの生きがいや自己実現に強くつながっていることを示している。

おわりに

本調査では、愛好家が草笛を心から楽しんでいることや、草笛にかかわったことでそれに関連したさまざまなことに興味・関心を広げていることが明らかになった。

興味・関心は個人的側面と社会的側面に分けることができ、個人的な興味の広がりを他者に伝えあい、共

有することで社会的なつながりを強めているとみることが出来る。

個人のもつ興味・関心には自身の健康への効果や草笛のもつ音楽性、草笛の歴史的背景、植物との関わりなどがあげられ、社会的な興味・関心といえるものにはコミュニティーの形成や社会貢献などがあった。

彼らは、仲間とともに楽しみながら草笛を吹くことで、失われつつある文化を守り後世に残すことや、草笛を通じて社会参加することにより、多くの喜びや満足感を得ていた。それは、愛好家の生きがいや自己実現に大きくかかわり、継続の意欲にもつながっていた。

草笛という身近な植物を利用した遊びが、音楽を楽しむ楽器として使われることで、個人の趣味だけにとどまらず、地域社会の活性にも貢献していることが明らかになった。

摘 要

東京近郊の草笛の会会員を対象に、アンケートと聞き取りにより草笛の会の実態と愛好家の意識を探った。草笛の会は、主に60歳以上の人たちが構成され、大半が50歳を過ぎてから初めて草笛を吹いた人たちであった。草笛演奏を聴いたことがきっかけで草笛を始め、技術の習得や向上のために会に入った人が多かった。草笛に使われている植物は、ヤブコウジ、スパティフィラム、シラカシの順に多く、合成樹脂製の模造葉を使う人たちもいた。愛好家たちは草笛で音楽を楽しむとともに、ストレス解消や健康を期待していた。彼らは、草笛が有効なコミュニケーションツールであることを実感し、それを草笛の魅力だと感じていた。また、演奏活動を通じた社会貢献および草笛の普及に意欲的で、他者から評価されることは生きがいや自己実現につながっていると考えられた。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、多大なご尽力をいただいた関東草笛の会代表世話人の河津哲也氏、アンケートにご協力いただいた草笛の会会員のみなさま、論文作成にあたりご指導いただいた東京農業大学農学部松尾英輔教授にこの場を借りて深謝の意を表します。

引用文献

- 日野原重明. 1996. 音楽の癒しの力. pp.44. 春秋社. 東京.
- 河津哲也. 2001a. 葉楽のすすめ 草笛のことなど(一). 備後春秋 72:21.
- 河津哲也. 2001b. 葉楽のすすめ 草笛のことなど(二). 備後春秋 73:11.
- 河津哲也. 2002. 葉楽のすすめ 草笛のことなど(三). 備後春秋 74:43.
- 河津哲也. 2003. 葉楽のすすめ 草笛のことなど(四). 備後春秋 76:53-59.
- 河津哲也. 2008a. 第20回関東草笛の会定期演奏会に寄せて. 関東草笛の会事務局.
- 河津哲也. 2008b. 草笛ニュース. 関東草笛の会事務局.
- 岸辺成雄. 1968a. 唐代楽器の国際性. pp.11-42, 38-40. 東洋音楽学会編. 唐代の楽器. 東洋音楽選書2. 音楽之友社. 東京.
- 岸辺成雄. 1968b. 五代前蜀始祖王建棺座石彫の二十四楽妓について. pp.270-288. 東洋音楽学会編. 唐代の楽器. 東洋音楽選書2. 音楽之友社. 東京.
- 小林 司. 1989. 「生きがい」とは何か. p.32. 日本放送出版協会. 東京.
- Lee, J.W. 2002. The music culture leaf-blowing: A free-reed musical instrument in China. 音楽と文化. 6:35-57. 世界音楽学会. (韓国語).
- 諸橋徹次. 1984 修訂版. 大漢和辞典 巻二. p.1145. 大修館書店. 東京.
- 内閣府. 2009. 高齢社会白書 平成21年版. pp.40-41. http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2009/zenbun/pdf/1s2s_5.pdf
- 日本国語大辞典第二版編集委員会. 2001. 日本国語大辞典第二版 第六巻. pp.942-943, 956. 小学館. 東京.
- 佐藤邦昭・佐藤英文. 1997. 草笛(新装版) 野の楽器をたのしむ. pp.144-145. 築地書館. 東京.
- 柴田南雄. 1988. 音楽とは何か. p.7. 蒲生郷昭・柴田南雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道万里雄編. 岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 第1巻 概念の形成. 岩波書店. 東京.
- 高間由美子・杉原利治. 2004. 高齢者の社会参加と生きがいに関する研究3. 高齢者の社会参加の課題. 東海女子短期大学紀要 30:65-75.
- 若尾 裕. 2000. 奏でることの力. pp.98-100. 春秋社. 東京.